

## DX 時代の大学における学生支援の一考察

－阪大ウェルカムチャンネルの取り組みを事例に－

大 山 牧 子\*  
西 川 晃 弘\*\*  
朝 日 瀬 菜\*\*\*

---

### ＜要 旨＞

新型コロナウイルスの蔓延により、大学の学生支援は大きく変容することになった。オンラインによる支援が余儀なくされたことにより、結果として DX が急速に推進されることになった。この変化を踏まえてポストコロナに向けた学生支援の在り方は既に議論が始まっている。本稿では、学生支援の範囲と内容を確認した上で、コロナ禍の 2020 年度に開始した大阪大学の新生支援プロジェクト「阪大ウェルカムチャンネル」の紹介を通して、ポストコロナにおける DX 時代の学生支援の在り方について考察することを目的とする。コロナ禍で学生が抱える悩みや、阪大ウェルカムチャンネルに対する新生の反応、またオンライン授業や初年次教育のアンケートに着目した結果、DX の推進はまず既存の取り組みのオンライン化への置換から、その後取り組みの拡張を模索することが有効であると考えられた。また DX 化された際の学生が身につけるべき能力が変わることを予想して、今後は多様な情報から学生自らが必要な情報を選択して活用できるような、メタ認知能力や自己調整学習のスキルを養成する新たな学習支援が必要であると考えられた。

---

---

\*大阪大学全学教育推進機構・助教

\*\*大阪大学大学院文学研究科・博士前期課程大学院生

\*\*\*大阪大学外国語学部・学士課程大学生

## 1. はじめに

2020年度は、突然の新型コロナウイルスの蔓延により、誰もが予測できない幕開けとなった。各大学は感染状況に応じた行事開催の判断や、オンライン授業への切り替え準備と学習機会の確保のための様々な対応に追われた。当然学生の側も初めての経験となるオンライン授業を受講するためにインターネット環境の整備などが余儀なくされた。とりわけ新入生にとっては、感染症対策の観点から入学式さえも実施されず、先の見えないオンライン授業体制の中で下宿生はいつ引っ越すべきなのかなど、大学生活に対して大きな不安を抱える春となった。このような未曾有の状況下で、文部科学省や日本学生支援機構（JASSO）、各自治体の学生への経済支援をはじめとして（牛尾 2021、日本学生支援機構 2021 など）、各大学は経済支援やメンタルヘルス、オンライン授業への支援など、多岐に渡って新たな学生支援の策を講じることとなった（例えば小林 2021、山内ほか 2020、山内 2021 など）。学生との直接の接触が叶わないことから、これらの支援がオンライン化して実施されたが、同時にこのことが現在様々な分野で推進される DX（Distal Transformation）を加速させることにもなった。ゆえに、ポストコロナにおいては大学生活が従来通りに戻るのではなく、新たな大学生活やその支援のあり方を模索する議論が大学や各種学会にて既になされている<sup>1)</sup>。

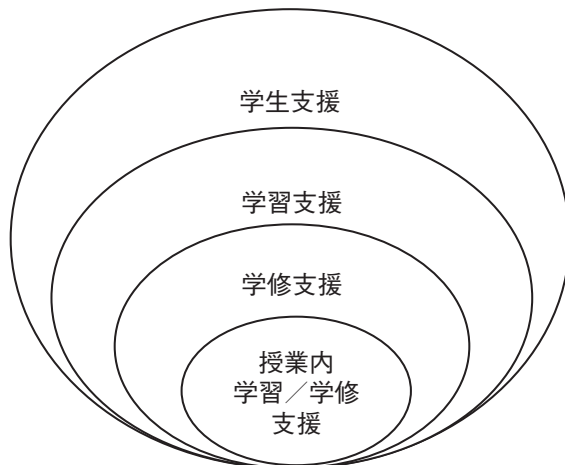
そこで、本稿では学生支援の概観と具体的な内容を確認した上で、コロナ禍の 2020 年度に開始した大阪大学の新入生支援プロジェクト「阪大ウェルカムチャンネル」の紹介を通して、ポストコロナにおける DX 時代の学生支援の在り方について考察することを目的とする。

## 2. 学生支援の概観

わが国の大学教育は 2009 年に大学の進学率が 50%を超えるユニバーサル段階に突入し、Trow（1972=1976）が示したように、大学生の学力・興味関心・卒業後の進路の多様化が進むこととなった。一方で、2008 年のいわゆる学士課程答申（文部科学省 2008）を皮切りに様々な教育改革がスピード感を持って行われるようになり、大学で何を学ぶのかという出口での質保証の強化が進められてきた。これに伴い、大学では専門的な知識を学ぶだけでなく、社会でも活用できる様々な汎用的な能力の獲得が目

指されるようになってきている（松下 2010）。このような状況下で大学は、正課内の学習においてはアクティブラーニング、また正課外においてもサービスマーケティングや海外体験学習などの機会提供が促進され、その照準は学生の多様な能力の育成にまで広がっている。多様な学習形態の実現に向けては、これまであまり注目されてこなかった授業外における学習も必要となるため、各大学はラーニングコモンズなどの学習環境の整備への努力も行っている（山内 2011）。このような背景から、近年授業内外において、学生の学習を中心とした支援が求められるようになってきている。実際に日本学生支援機構が各大学を対象に実施した調査によると（n=782）、学生支援の強化・充実を期待する大学が9割以上で、高い期待を抱えていることがわかる（日本学生支援機構 2019）。なお、ここでの学生支援は学生生活における支障・困難の除去、正課の学習成果の向上、大学生活への積極的な態度の向上を示しており、多岐に渡る学生支援への期待が高まっているといえる。

ここで、学生支援の範囲と内容を整理したい。足立（2017）は、大学における学生支援を図1のような関係性で示している。この枠組みを用いて、現在の学生への具体的な支援内容を確認する。



出所：足立（2017）より抜粋

図1 〈学生・学習・学修〉支援関係図

最も大きな円である学生支援には、日本学生支援機構の調査内容が位置付けられている。具体的には 2019 年の調査項目である（日本学生支援機構 2019）キャリア教育・就職支援、生活支援、課外活動等、学生相談、成績不振中途退学等が挙げられており、幅広く大学生の生活に関わる支援であることがわかる。

次に大きな円である学習支援<sup>2)</sup>は、大学における授業での単位取得に限らず広く学習全般に関わるものであり、大学の学習に必要なアカデミック・スキルズや、ラーニング・コモンズ等授業内外における学習環境の支援もその範疇にあると考えられる。

そして中心に位置する学修支援は、授業の単位取得に関わる支援であり、授業内容の補足やリメディアル教育が具体的な支援内容として想定され、図書館や学習支援を実施する部署がその取り組みを担当すると考えられる。また、最も狭い範囲の授業内の学習／学修支援は、授業担当者や TA などによる、授業内容に関するフィードバックや補足等が想定される。

このように「学生支援」とひとことで言ってもその支援の内容は多岐に渡っており、大学における担当部署も一様ではないだろう。また、大学教育改革に伴って、学生支援は徐々にその内容を拡張してきたが、コロナ禍では学生生活や学習活動が一変したこともあり、その支援内容や在り方も大きく変化すると推察される。次章では、「阪大ウェルカムチャンネル」の学生支援としての位置付けを行うために、大阪大学全学教育推進機構における近年の学生支援の内容を紹介する。

### 3. 大阪大学全学教育推進機構の学生支援

#### 3.1 従来からの学生支援

大阪大学においても、上述したような JASSO で扱う範囲の学生支援を全学的に、あるいは部局ごとにも種々実施している<sup>3)</sup>。本稿では、コロナ禍に実施した「阪大ウェルカムチャンネル」を中心に新入生の学生支援に着目するため、全学共通教育を受講する学生の支援を行う全学教育推進機構の学生支援について紹介する。

全学教育推進機構では、主に授業内外の学生（学習・生活）支援を担っている。具体的な支援内容は以下の通りである。

**【授業関連】**

- ・ティーチング・アシスタント（TA）
- ・履修指導のチュードレント・スタッフ（SA）
- ・ラーニング・サポートデスクによる学習相談
- ・スタディスキルセミナー（図書館と連携）
- ・ファカルティラウンジ（機構内に研究室を持たない先生のオフィスアワー時の相談場所に利用）
- ・障がいのある学生への支援
- ・欠席が続く学生への対応

**【授業外での学習・生活】**

- ・学生支援プロジェクト「阪大×学問」（在校生へのインタビュー及び座談会を紹介、補完的でなく発展的な学習支援）
- ・クラス代表者懇談会（全学部のクラス代表と機構の教員の懇談会。授業、カリキュラム、学習環境の意見や要望について議論する場。1 セメスターに1回実施）
- ・ラーニング・コモন্ズの整備

このように全学教育推進機構では、学生の学習や生活に関わる支援を制度や環境面で構築し、さらに他部局と連携してコンテンツ提供を行っている。多くの大学でも行われている学生支援と同様の取り組みも多いが、他方で補完的な学習支援に限らず、学生支援プロジェクト「阪大×学問」のように学びを深めようとする学生のための発展的な支援や、クラス代表者懇談会のように学生との対話に基づいて学生支援を再構築する機会を設けている点が特徴的だといえる。

**3.2 コロナ禍における学生支援**

突然突入したコロナ禍は、新入生のみならず大学生全体の生活も大きく変えることとなった。Twitter でも話題になった「#大学生の日常も大事だ」は、それに象徴されるが（村上 2020、佐藤 2020）、大阪大学生も例に漏れず不慣れな学生生活を余儀なくされた。ここでコロナ禍における学生支援の在り方を探るために、大阪大学生の部活動における筆者の経験に基づいたコロナ禍の活動体制の変化に関する事例を紹介したい。

## 事例：体育会フィギュアスケート部における活動体制の変化

### 1. 新歓（新入部員歓迎活動）の開催中止

部活動やサークルの新歓といえば、4月の大学キャンパスの風物詩で、先輩学生がピラを配布して声をかけたりして部員の確保に勤しむ風景が浮かぶだろう。しかし、2020年度は違った。コロナ禍では、通常の新歓ができなくなったことで、在學生はSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）を活用しながら情報を個別に発信し、創意工夫を凝らして新歓を行ったが、それでも新入部員の獲得は難しかった。特にフィギュアスケート部については、次の理由で新入生とコミュニケーションを取りながら深く説明をする必要があった。

「もともとフィギュアスケートに興味を持っている人しか、スケート部のSNSにたどり着かない。阪大スケート部は実際には初心者が多いにも関わらず、経験者しか入部できないと思われてしまうことが少なくない。」

大学での部活やサークルの種類は無数にあり、一般的に中高までの部活動にないタイプの部活やサークルは、未経験でもいかに興味を持ってもらうのかが、新歓にかかっているとって過言ではないだろう。2020年度のフィギュアスケート部については、「一旦は入部するものの、雰囲気あまり伝わっていなかったのか途中で辞めてしまう人も多かった。」ということから、SNSでの限られた環境での新歓では、十分に部活の様子が伝えられず、ミスマッチを起こしてしまったことや、活動への周辺参加から十全参加への移行がうまく行かなかった場合が考えられる。

### 2. 無観客試合

他のスポーツ大会と同様に、フィギュアスケートの大会も中止、または無観客試合で開催されることとなった。無観客試合では、試合の様子が配信されるものの、本番の臨場感は限られたものとなり、結果もオンラインでの発表となった。さらには試合後の打ち上げはもちろん禁止であった。通常では、試合や打ち上げで部外の人とコミュニケーションを図り、そこで人脈を作りながら振り付けの依頼なども行っていた。

### 3. 大学の活動基準に基づいた部活動

大阪大学に限らず、いずれの教育機関や企業や行政機関においても様々な活動基準が設定され、コロナ感染の状況に応じてその基準の見直しが行

われた。部活動においても、大学の「課外活動」の項目に準じてその活動が調整された。この基準は状況によって突然の引き上げが起こることから、「明日から全ての練習が禁止です。」や、練習はできなかつたのに「明日の試合は参加可能です。」などと前日に決まることもめずらしくなく、モチベーションの維持が困難であった。また、この基準は大学によって異なることから、他大学生は練習できるのに自分たちだけできない状況で感じる成長の差もそれを助長していた。

このような状況を鑑みると、コロナ禍における学生支援は、従来の支援以外にも必要になってくると言える。近年、課外活動やサービ斯拉ーニングが学生の成長に寄与している結果を示す研究も多くあるが（河井・木村 2013、池田ほか 2018 など）、コロナ禍において、このような課外活動を支援する方策を想定することも学生支援の範疇になる可能性が強い。

大阪大学においても、コロナ禍における学生支援は拡張され、全学体制で全学教育推進機構の教員が中心となり、全学体制で新たに以下の取り組みが行われることになった。

- ・ 阪大ウェルカムチャンネル
- ・ ウェルカム阪大（交流イベント）

2020年度は、キャンパスに入構できなくなった新入生向けに大学としての歓迎会や学生同士の交流を目的として、十分に感染対策を講じた上で、大学やキャンパスの紹介を中心とした対面のイベント（ウェルカム阪大）が実施された。次章では、2020・2021年度に実施した阪大ウェルカムチャンネルについて紹介する。

## 4. 阪大ウェルカムチャンネル

### 4.1 阪大ウェルカムチャンネルの概要

阪大ウェルカムチャンネルは、コロナ禍においてキャンパス入構が叶わなくなった学生の中でもとりわけ新入生を対象に、「入学前ならびに入学後に動画コンテンツをオンライン配信することで新入生の不安の解消や学びの支援を行うこと」を目的とした、大学生活に関わる様々なコンテンツを提供するプロジェクトである。2020年3月、大学への入構禁止措置が決定してすぐに教育担当理事直下のプロジェクトとして、全学教育推進機構の教員6名と学生スタッフ7名によるウェルカムチャンネル制作チーム

が発足した。ウェルカムチャンネル 2020 年度の配信方針は以下と定めて（村上ほか 2020）コンテンツの制作・配信・広報を行った。

- ① コンテンツを制作し、YouTube の限定公開機能を用いて、非同期で公開準備する
- ② 平日毎朝 10 時 30 分に 1～3 本の新規コンテンツを配信する
- ③ 動画公開と同時に平日の午前中に LINE の公式アカウントから配信内容とコンテンツの URL を告知する（6 月 1 日より配信頻度を毎週金曜日に変更）LINE への登録手段は対面での入学ガイダンス時に QR コードが掲載されたフライヤーを配布し、後に学内専用ポータルサイトにも掲示している
- ④ 新規コンテンツの制作と LINE による告知は春夏学期が終了する 7 月までとする

なお、2021 年度の配信方法は 2020 年度と概ね同様であるが、LINE による配信が週に 1 回を目安とした不定期の通知になったことと、配信期間が 2021 年 12 月現在も継続していることが変更点として挙げられる。

各年度の配信動画数、LINE 登録者数、総視聴回数は以下の表 1 に示す。

表 1 阪大ウェルカムチャンネルの視聴概要

年度	配信動画数	総視聴回数	LINE 登録者数
2020	56 本	約 25,000 回 (2020 年 4 月 9 日～7 月 27 日)	1,025 名
2021	80 本 (昨年配信分を含む)	約 48,000 回 (2020 年 4 月 9 日～2021 年 9 月 30 日)	1,087 名

出所：筆者作成

配信コンテンツの内容とその内訳は、学習に関わるコンテンツ 35 本（39%）（e.g. 阪大模擬授業・完璧マスター！スタディスキルズ講座）、学生生活に関わるコンテンツ 13 本（14%）（e.g. OU RADIO・課外活動オリエンテーション Web サーオリに参加しよう！）、スポーツ・健康に関わるコンテンツ 21 本（23%）（e.g. 藤田先生のマツツル体操・新型コロナウイルスを知ろう）、その他 22 本（24%）（e.g. 履修登録基礎の基礎・大阪大学



学生歌)である。より詳細なコンテンツの情報は村上ほか(2020)から入手できる。

2020年度に制作した動画を2021年度にも引き続き提供している動画もあることから、表1の通り各年度の詳細な視聴回数の内訳は不明瞭な部分もあるが、平均しても1本あたり600回の再生があったこととなる。

図2に2021年のLINE配信画面を示す。LINEの配信時には、それぞれ新配信の動画の紹介や、これまでの動画を改めて紹介していたが、2021年度は、内容を一見してわかりやすくするために、図のようなサムネイル画像を用いることとした。



図2 阪大ウェルカムチャンネル LINE 配信イメージ図

## 4.2 学生支援としての阪大ウェルカムチャンネルの役割

2020年度の阪大ウェルカムチャンネルの学生アンケート結果（n=128）（村上ほか 2020）にあるように、（なお、2021年度はまだ学生アンケートを実施していない）「大学からのサポートを受けていると感じた」は86%、「ためになる情報が多かった」は81%が5件法で「とても思う」「やや思う」と答えていることから概ね満足度が得られていることが示されている。では、阪大ウェルカムチャンネルは学生にとってどのような役割があったのだろうか。

### 4.2.1 学習支援としての役割

学習に関わる代表的なコンテンツは上記の通り、主に「阪大模擬授業」・「完璧マスター！スタディスキルズ講座」などであった。

阪大模擬授業は2020年度、授業開始が遅延した学生にその間の学びを補うために、様々な学問分野の特徴的な授業を模擬的に体験できるコンテンツとして制作した。具体的なコンテンツは、「遠くて近き仲－知られざる日本とスウェーデンの交流－」、「大学だからできる外国語の学び方」、「幸福とは？－哲学・倫理学の歴史から－」、「月の科学の最前線」、「ミクロな世界の不思議－量子力学入門－」、「知的書評合戦！－ビブリオバトル入門－」（ここまでが2020年度制作）、「触れずに奏でる－電子楽器テルミンの物理学－」、「適塾逍遥－世界と日本を架橋する実学－」、「ロボットで解き明かす知能の謎」（ここまでが2021年度制作）というように、多様な分野の授業を紹介することで、総合大学で学ぶ意義を伝えることを意図した。

大阪大学では、2019年度のカリキュラム改革において、学部から大学院まで一貫した教育体系を体现するべく、初年次から学部高年次、大学院に渡るまで教養教育・専門教育・国際性涵養教育<sup>4)</sup>の3つの柱で教育体系が構築された。どの学年においても専門性以外にも多様な分野の学問を学ぶカリキュラムになっているが、阪大模擬授業のコンテンツは、新入生に総合大学としての大阪大学の学問の幅広さを見せることに意義があるといえるだろう。新入生が入学時に多様な分野の学問に触れることで、高度教養教育のカリキュラムを学ぶための指標や心構えにもつながると考えられる。

「完璧マスター！スタディスキルズ講座」は、大学で学ぶために必要とされるアカデミックスキルズを扱ったコンテンツであり、具体的にはプ

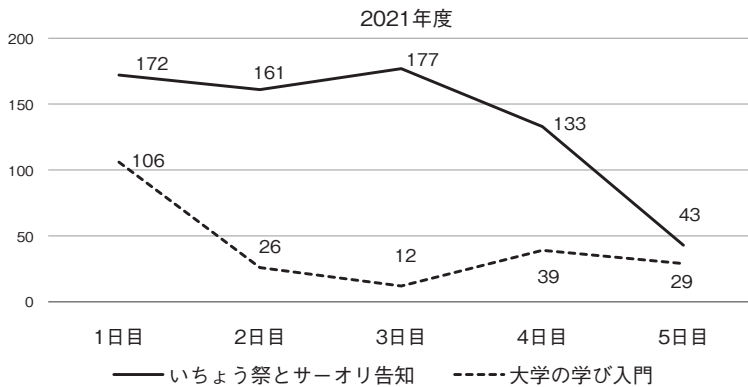
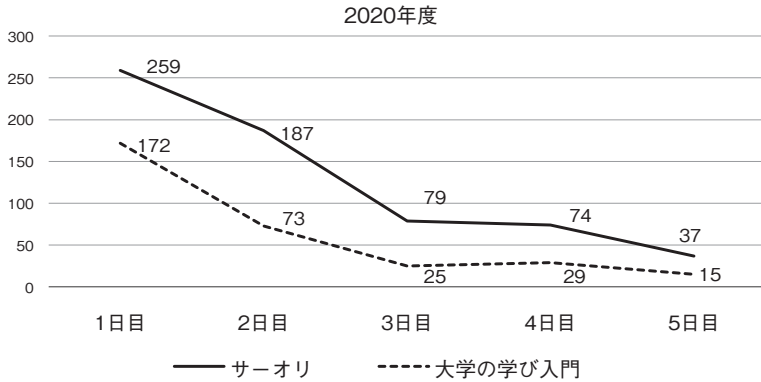
レゼンテーションやアカデミックリーディング、アカデミックライティングの方法を紹介している。

大学生のアカデミックスキルズ習得への課題は、近年の大学教育改革における多様な「新しい能力」獲得の要請（松下 2010）の一部として注目されてきており、それに応える方策の一つとして、近年多くの大学で初年次教育が導入されている。大阪大学も例に漏れず、2019年度より初年次必修科目「学問への扉」を提供しており、多様な学問分野の導入に触れながら、アカデミックスキルズの習得を目指している。このコンテンツは、阪大ウェルカムチャンネル開始当初、授業が始まるまでの学習用コンテンツとして高校から大学への学習の円滑な移行を目的として提供された。しかしながら本コンテンツは、今後も入学前教育としての活用が十分に想定できると考えられる。国立大学は総じて合格の決定が遅く、私学と比較すると充実した入学前教育が実現できない現状がある。本コンテンツはその課題を幾分か打破できるかもしれない。また、初年次教育においても、教員が補助教材として今後用いる可能性があると考えられる。

このように、学習支援のコンテンツは当初の授業がない期間の隙間を埋めるコンテンツとして制作されたが、結果として、高度教養教育への接続や、入学前教育にも今後の活用の幅が広がると考えられる。

#### 4.2.2 学生生活支援としての役割

阪大ウェルカムチャンネルは上述の通り、新入生の学習支援に寄与したと考えられるが、コンテンツの配信1日目から5日目の視聴回数に着目すると、図3の通り学生のニーズは異なることが確認できる。2020年度は、「大学の学び入門（学習支援）」347回・「サークルオリエンテーション（学生生活支援）」647回、2021年度は、「大学の学び入門アーカイブ配信（学習支援）」226回・「いちよう祭ならびにサークルオリエンテーション（学生生活支援）」672回である。最終的に学生生活支援コンテンツは、2020年度862回、2021年度888回と、LINE登録者約1,000名のうち80%が視聴していることから、高い興味を示されたことが確認できる。



出所：筆者作成（※サーオリ：サークルオリエンテーション）

図3 コンテンツの視聴回数（学生生活支援と学習支援の配信5日間の比較）

2020年度は授業の開始が遅れたことから、学習支援コンテンツの視聴回数も高いが、どちらの年度も学生にとっては学生生活支援のコンテンツに興味集中していることが確認できる。これは、上で述べたとおり、在学生の学生生活の不安と同様に、新入生にとっても学生生活に不安を感じてこのような情報を求めていることがわかる。阪大ウェルカムチャンネルは一方向の情報提供となるため、3.2に示した学生の悩みを完全に解決

するには至らないが、通常であればキャンパス内で行われていたような情報交換が困難となったコロナ禍においては、学生生活をスタートさせるための一助にはなったであろうと考えられる。

### 4.3 学生スタッフとしての学びの役割

阪大ウェルカムチャンネルは、4.1 で述べた通り、教員と学生のグループから成るプロジェクト形式で進められた。このプロジェクトが、学習支援コンテンツと学生生活支援のコンテンツの両方を提供できたのは、学生スタッフの意見を取り入れることによって、在学生の立場からも新入生のニーズを考えることができたからだといえるだろう。

学生スタッフはプロジェクトに関わった感想を以下のように述べる。

「普段の学生生活では、あまり関わるできない先生や学生と撮影ができて楽しかった。自分が知らないだけで、大学には面白い先生や学生がたくさんいる。」

「バスが大好きな人の深すぎるバス愛を見たり、先生の家族旅行の写真を見せて頂いたりできて、部活でもアルバイトでも出会えない人と出会えた。」

「あまり話したことのなかった人と撮影を行うのは、刺激的で有意義な経験でした。」

少人数ではあるが、このように関わった学生たちが授業外において、コンテンツ制作のノウハウの習得や、プロジェクト学習の進め方の学びを得た可能性はあるだろう。

## 5. コロナ禍における学生支援

### 5.1 阪大ウェルカムチャンネルから見るポストコロナの学習支援

4.2.1 で述べた通り、阪大ウェルカムチャンネルにおいて、新入生に学習支援コンテンツを制作提供したことをきっかけに、総合大学で学ぶ学際的な知的好奇心の喚起や、アカデミックスキルズ習得の周知を通じた入学前教育の可能性が示唆された。

ここで、実際の初年次教育に関する学生調査の結果から学習支援を見てみたい。大阪大学が2019年度から開始した初年次教育「学問への扉」の

能力獲得の感覚を尋ねた受講アンケート（村上ほか 2021a）（2019 年 n=2,306 【コロナ前】、2020 年 n=2,666 【コロナ禍】）（図 4 参照）によると、むしろオンラインで実施された 2020 年度の方が能力獲得の感覚が上回る項目も多く見られる。コロナ禍で下がっているのは、〈話す力・リーダーシップ・プレゼンテーション・コミュニケーション・文化的国際的な多様性の認識〉であり、やはり対面で教員や学生同士での関わりが必要と考えられる項目であった。全体で見ると、他の項目と比較して低いのは、〈リーダーシップ・プレゼンテーション・コミュニケーション・文化的国際的な多様性の認識〉であった。これらの力を養成する仕組みを初年次教育の中で導入することが求められるが、ポストコロナにおいてもこれらに特化したコンテンツを阪大ウェルカムチャンネル等の動画コンテンツで提供するなど、初年次教育の補助教材としての活用が考えられる。

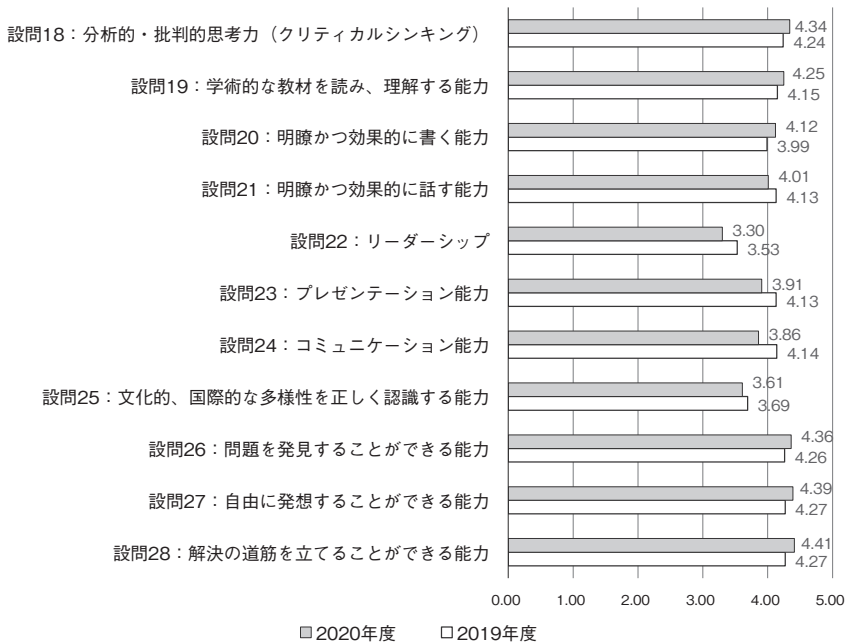
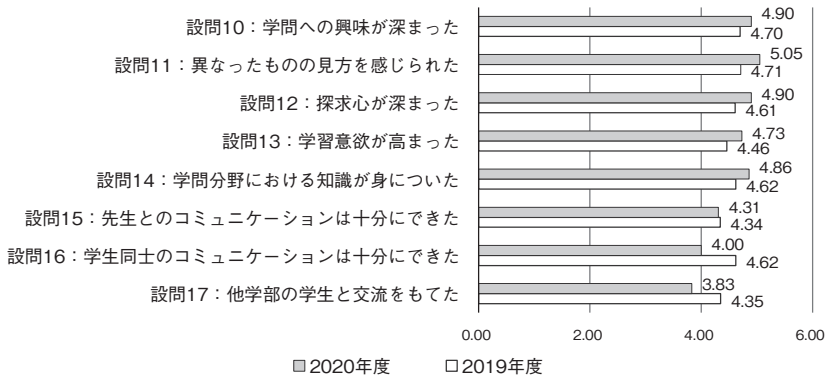


図 4 大阪大学初年次教育に関する学生アンケート習得した能力の感覚

## 5.2 阪大ウェルカムチャンネルから見るポストコロナの学生生活支援

学生生活支援についても阪大ウェルカムチャンネルはコロナ禍の学生生活の参画に一助となる可能性を述べたが、ポストコロナにおける支援はどのようなになるだろうか。従来は、公式に大学から学生へ第2章で述べたような様々な支援制度が整えられており、他方で先輩学生から新入生へと、部活・サークルへの勧誘や授業情報といった非公式な支援がなされていた。新入生はそれら両方の情報や支援を得ながら大学に十全参加へと移行していた。それがコロナ禍において、公式な支援については、多様な機関で経済的支援やオンライン授業の受講支援など、様々な手立てが講じられた。ただし、学生同士の非公式な支援についてはキャンパスの立ち入り禁止等で行動が制限されたことから、多くの活動が抜け落ちてしまう事態となった。阪大ウェルカムチャンネルは、学生同士の支援を一部間接的に支援したと考えられるが、やはりこのようなコミュニティ形成の機能はポストコロナにおいて、オンラインコンテンツを活用しながらも、概ね元に戻るのではないかと推察される。

これらコミュニティ形成については授業においてもでも同様の悩みがある結果が示される。5.1と同様の初年次教育に関するアンケートの受講の感想の項目において、図5の通り、「設問16 学生同士のコミュニケーションは十分に取れていた」「設問17 他学部の学生と交流を持てた」については、2020年度その値が下がっていることがわかる。別の大阪大学におけるメディア授業に関するアンケートの結果（村上ほか2021b）を見ても（2020年度5月n=4,244、8月n=3,161 全学士課程学生を対象）、対象者が違うため一概には比較が難しいが、「単位認定がどのようになるか不安」や「不明な点について友人などと議論できない」の項目において、50%を越える学生が「問題があった」と答えている。これは、コミュニティ形成が不十分な場合、授業の受講への不安につながる可能性が確認できる。このことから、学生生活支援の中でもとりわけコミュニティ形成の支援を行うことは、間接的に学習支援にもなると考えられる。ゆえに、ポストコロナにおいて、学生同士の支援活動が対面で復活したとしても、オンライン等で学生生活の支援を大学が行うことには意義があると考えられる。

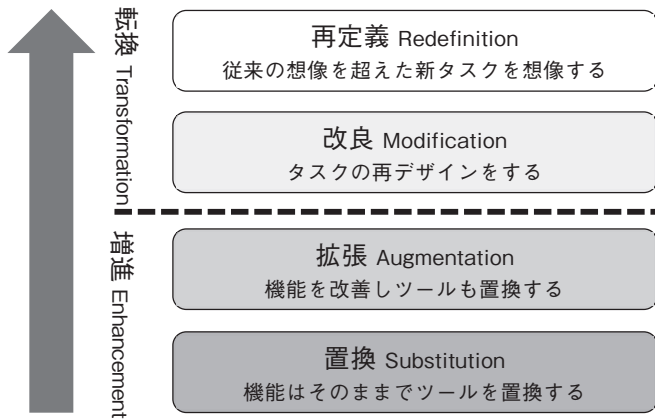


出所：村上ほか（2021a）より抜粋

図5 大阪大学初年次教育に関する学生アンケート受講の感想

### 5.3 阪大ウェルカムチャンネルのDXへの貢献

ポストコロナにおける学生支援とDXを検討するにあたり、教育におけるICT活用の段階の枠組みである図6に示すSAMURモデル（Substitution, Augmentation, Modification, Redefinitionの頭文字）（Puentedura, R. (2011)）を用いて考えたい。このモデルは、教育においてICT活用が進んだ際、既存の活動がどのように変容するのかを捉える指標である。



出所：（Puentedura, R. 2011）より筆者作成

図6 SAMRモデル



阪大ウェルカムチャンネルの学習支援の機能は、SAMR モデルでいうと、従来のコンテンツをオンライン化したことで「置換」段階であったが、そこから、入学前教育への活用が見出せたことから、「拡張」へと移行する可能性が考えられる。ここからさらに学習支援のオンラインコンテンツを改良や再定義へと転換していくには、学習支援の内容自体を問い直す必要があるのではないか。例えば、現在はアカデミックスキルズのようなコンテンツが提供されており、今後はその幅を広げることが有効であると述べてきたが、さらに拡張できるかもしれない。今後学生は多様なオンラインコンテンツの中から自ら選択し、自分仕様にカスタマイズして学習することが想定される。このことから、自己調整学習の能力やメタ認知の能力を身につけられるようなコンテンツを提供し、DX時代の学びを支援することが重要になるのではないかと考えられる。

阪大ウェルカムチャンネルの学生生活支援の機能は、SAMR モデルでいうと、学生同士の相互扶助的な関係性の構築活動を間接的に支援したことから、「拡張」に位置づくと考えられる。ただし、5.2.で述べた通り、学生同士のつながりは、授業内と授業外で完全に分離できるものではなく、偶発的に連動しているものである（村上・浦田 2021）。授業外で、学生同士のコミュニケーションをとれるような場を提供するだけでは不十分であることを認識した上で、関係性の支援の仕組みづくりを考慮することで、授業内外をまたぐ新たな学生生活支援が可能になると考えられる。

## 6. まとめ

本稿では、コロナ禍に開始した大阪大学の新生支援プロジェクト「阪大ウェルカムチャンネル」の紹介を通して、DX化が進むポストコロナ時代における学生支援の在り方について探索的に述べてきた。

誰もが予期しなかった状況において、手探りで行われた学生支援は、結果としてDX化が進められることとなった。それは単に、既存のコンテンツや活動をオンライン化しただけではなく、その在り方が改めて問われることとなった。DXの急加速を目指して活動の再定義を目指すのではなく、まずは従来の支援をオンライン化（置換）した上で段階的に活動の転換を考えることが有効であると考えられる。また、DX化された際の学生が身につけるべき能力が変わることを予想して、今後はインターネット上に無数に存在する情報から自分が必要な情報を選択して、活用できるよう

な、メタ認知能力や自己調整学習のスキルを養成する新たな学習支援が必要であると考えられる。さらに、授業内外の支援の境が曖昧になることから、学習支援と学生生活支援の連動が必要になると考えられた。

本稿では、十分な証拠をもった資料ではないが、阪大ウェルカムチャンネルの開発とコンテンツ提供は、コロナ禍において学習支援や学生生活支援を推進する役割を担った。さらに、DX化された学生支援を構想するきっかけの一つになったと考えられる。ポストコロナにおいて学生支援が従来に戻るのではなく、活かされてさらに発展していくと確信している。

## 注

- 1) 例えば、オンライン授業の在り方については、教育システム情報学会が2020年に「レジリエントな学びを支える実践的取り組み－新型コロナウイルスへのオンライン授業対応－」の特集号を発刊している。メンタルヘルスおよび心理的な問題については、日本心理学会が、2021年に「新型コロナウイルス感染症と心理学」という特集号を発刊している。
- 2) 「学習」と「学修」の使い分けには諸説あるが、本稿では、中央教育審議会答申（文部科学省2012）から、一般的な学び（learning）を示す場合には「学習」、大学において、単位を修めるために学ぶことを示す場合には「学修」を用いることとする。
- 3) 大阪大学の学生支援については、下記サイトを参照。（<https://www.osaka-u.ac.jp/ja/campus>, 2021.12.24）
- 4) 大阪大学のカリキュラム改革については、下記サイトを参照。（[https://www.osaka-u.ac.jp/ja/education/academic\\_reform/curriculum\\_H31/curriculum](https://www.osaka-u.ac.jp/ja/education/academic_reform/curriculum_H31/curriculum), 2021.12.24）

## 参考文献

- 足立佳菜、2017、「学習支援と協働学習：東北大学 Student Learning Adviser の事例を踏まえて」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』3:27-40。
- 河井亨・木村充、2013、「サービス・ラーニングにおけるリフレクションとラーニング・ブリッジングの役割 立命館大学「地域活性化ボランティア」調査を通じて」『日本教育工学会論文誌』36(4): 419-28。
- 小林雅之、2021「困窮する学生生活－新型コロナウイルス感染症拡大による大学生への経済的影響」『連合総研レポート』362: 6-9。
- 池田めぐみ・伏木田稚子・山内祐平、2018、「大学生のクラブ・サークル活動への取り組みがキャリアレジリエンスに与える影響」『日本教育工学会論文誌』42 (1): 1-14。
- 文部科学省、2008、「学士課程教育の構築に向けて」『中央教育審議会答申』。
- 文部科学省、2012、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」『中央教育審議会答申』。
- 松下佳代、2010、「〈新しい能力〉概念と教育」松下佳代編『「新しい能力」は教育を変えるか』ミネルヴァ書房、1-44。
- 村上正行・佐藤浩章・大山牧子・権藤千恵・浦田悠・根岸千悠・浦西友樹・竹村治雄、2020、「大阪大学におけるメディア授業実施に関する全学的な支援体制の整備と新入生支援の取り組み」『教育システム情報学会誌』37(4): 276-85。
- 村上正行・進藤修一・田中敏宏、2021a、「大阪大学におけるオンライン授業に対する教員・学生の評価」『日本教育工学会 2021 年春季全国大会講演論文集』151-152。
- 村上正行・安部有紀子・中美緒・杉山清寛・宇野勝博、2021b、「大阪大学における全学初年次教育「学問への扉」のオンライン化とその影響」『第 27 回大学教育研究フォーラム』149。
- 村上正行・浦田悠、2021「大学における「つながりの実感」とオンライン授業」『質的心理学フォーラム』13: 28-36。
- 日本学生支援機構、2019、『大学等における学生支援の取組状況に関する調査』([https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei\\_torikumi/2019.html](https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_torikumi/2019.html), 2021.12.24)
- 日本学生支援機構、2021、「新型コロナウイルス感染症に係る影響を受けて家計が急変した方への支援」。( [https://www.jasso.go.jp/shogakukin/moshikomi/rinji/kakei\\_kyuhen/coronavirus.html](https://www.jasso.go.jp/shogakukin/moshikomi/rinji/kakei_kyuhen/coronavirus.html), 2021.12.24)
- Puenteudura, R., 2009, "A Brief Introduction to TPCK and SAMR". ([www.hippasus.com/rrpweblog/archives/2011/12/08/BriefIntroTPCKSA](http://www.hippasus.com/rrpweblog/archives/2011/12/08/BriefIntroTPCKSA))

MR.pdf., 2021.12.24)

Trow, M., 1972, "The Expansion and Transformation of Higher Education", *General Learning Press*. (=1976、天野郁夫・喜多村和之訳、『高学歴社会の大学－エリートからマスへ』東京大学出版会。)

牛尾則文、2021、「新型コロナウイルス感染症への文部科学省の対応について」『IDE 現代の高等教育』624: 54-47。

山内星子・松本真理子・織田万美子・松本寿弥・杉岡正典・鈴木健一、2020、「大学における新型コロナウイルス感染症流行下の学生支援実践と今後の展開」『学校心理学研究』20(1): 47-54。

山内祐平、2011、「ラーニングコモンズと学習支援」『情報の科学と技術』60(12): 478-82。

山内祐平、2021、「コロナ禍における 大学教育のオンライン化と質保証」『名古屋高等教育研究』21: 5-25。